

## 社会 4 (521~528)

座長 東江康治・江川 亮

- 521 Stick Figureによる<姿勢>の分析  
東京都立大学 川 浦 康 至
- 522 地域的アイデンティティの広がり  
東北大学 仁 平 義 明
- 523 女子青年の職業価値意識の構造  
お茶の水女子大学 田 中 佑 子
- 524 スクール・モラルに関する研究 (VII)  
大阪教育大学 松 山 安 雄
- 525 達成動機および親和動機の発達に関する研究 (I)  
526 達成動機および親和動機の発達に関する研究 (II)  
①琉球大学 東 江 康 治  
②琉球大学 前 原 武 子
- 527 日本的人間関係論の分析  
東京都立大学 加 藤 義 明
- 528 日米青年の生活意識に関する比較調査  
芝浦工業大学 江 川 亮

521 について鈴木(熊本大)から、単なる姿勢の記述に終る Figure と心理的状态まで推定される Figure との、よってきた原因はなにかとの質問があった。これに対して、はっきりはいえないが、その Figure が何をしている姿勢なのか明確な場合には、動作の記述反応が多いといえるとの回答があった。

522 に対しては、星野(基督教大)から、さらに他の地域においても、地域的アイデンティティの広がりについての要因分析をすれば、その広がりだけでなく、それを支える構造もわかってくるのではないかとコメントがなされた。

523 には、鈴木(熊本大)より、データの取り方としての評定法、自由記述法、選択法と分析方法での表層、中層、中心層とを対応させた根拠についての説明が求められた。これに対して、ここで層というのは、生活場面の選択レベルであり、等しく自分の職業意識を述べる場合でも、場面によって異なる反応が表出されるであろうこと、また、女性の職業意識が低いとよくいわれるが、どの場面をとらえているのかを明確にすべきだと考えたことから、この方法を用いたと説明された。

524 に関しては、星野(基督教大)から、この研究でいうスクール・モラルの概念について、①産業心理でのモラル概念との関係、②Cattell が用いている syntality との概念的区別と関係、③全体としての学校

生活に対する一体感こそがスクール・モラルではないのかということについての質問があった。①に対しては、この研究独自の用語で、学校生活への積極的参加を意味する概念、② syntality とは違った次元の概念であり、それぞれの学級の syntality が個々の子どものスクール・モラルを規定していると考え、③全体としてのスクール・モラルの構成要因は多様であるが、測定のためには、この研究の6要因がもっとも意味あるものと考えているとの回答があった。

525, 526 については、達成動機および親和動機の測定方法一質問紙法と投影法と間の低相関に関して意見の交換が行われた。そのうち星野(基督教大)は、両方法の結果が違ふのは、人格査定における場合と酷似しており、一般に質問紙法は静的側面や意識水準を測っているのに対して、投影法は力動的側面や無意識水準を測っているため、両方法に差があったとしても驚くに当たらないと述べ、達成動機については、一過的な方法を用いるよりも、むしろ長期にわたっての観察、測定、評価の総合が妥当であろうと述べた。これを受けて東江は、両方法の違いは McClelland のいうように、1つは respondent であり、他は operant であって、この2つは異質である。今後は、従属変数によってどの独立変数(質問紙か図版か)を使うべきかを検討すると述べた。仁平(東北大)から、両方法のくい違いは、質問紙の項目に「社会的望ましきさ」によるバイアスがかかり易かったためと解釈できないかと質問があった。前原は、これに対して、質問紙にそれが介在したと予想され、結果をみても、投影法の方が妥当性をもつことが推測されると答えた。

527 には、松山(大阪教育大)から、各因子は4人の日本人論を十分に特徴づける内容をもつとよいかとの質問がなされた。これに対して、そうではなく、4個の因子が独立であることから、各日本人論は、それぞれ個別の特徴をもつという目安を提出したといえるとの回答があった。

528 には、田中(お茶女大)が、私生活主義の形成に関する実証的資料はないか、また、学生の場合、公共的社会への関心と国家への関心が明確に分離されていないのではないかと意見を求めたのに対し、私生活主義には核家族化がもっとも関係をもつものではないかと考えているとの回答があった。半沢(会津短大)は参考資料を提示して江川の回答を補足した。

(東江康治・江川 亮)